

天草弁 近代小説

天草方言で読む【坊っちゃん】 夏目漱石 鶴田 功 〈意識〉

親ゆづりん無鉄砲で子どもが時から損ばっかりしとる。小学校におる時分、学校ん二階から飛び降りて、一週間、腰ば抜かしたことんある。

新築ん二階から首ば出しとったりや、同級生の一人が冗談に、いくら威張とったっちゃそこから飛び降りやえんどもん、弱虫よい、ちゆて嘸し立てたけんたい。

親類の者から西洋製のナイフば貰うて、綺麗か刃ば日にかざして友達に見せとったりや、一人が光るこた光るばって、切れそうにやなちゆうた。切れんことんあろかい、何でん切って見するちゆて請け合うた。そんなろ、わりが指ば切ってみろて注文したけん、何や指ぐりやだこん通りたい、右手の親指ん甲ば斜に切り込うた。

幸いナイフが小もして、親指ん骨が堅かったけん、未だに親指は手に着いとる。ばって、傷跡は死ぬまで消えんどだ。

その他、いたすらもだいぶやった。そんな度び、母が詫びに行たり、怒鳴り込まれて罰金取られたりしたこつもあった。

親父は、いっちょん俺ば可愛がってくれんじゃった。母は兄ばかりひいきにしとった。

こん兄は、どもこも色ん白うして、芝居ん真似して、女形になつとが好きじゃった。

おりば見るたんべんに、こいつあどうせろくなもんにならんとて、親父が言うた。どもこも乱暴で、行く先が案じらるるちゆて、母が言うた。なるほど、ろくなもんにならん。見たとおりの始末たい。行く先が案じらるるとも無理はなか。ただ、懲役に行かでにや、生きとるばかったい。

母が病気で死ぬ2・3日前たい。台所で宙返りばして、竈ん角で肋骨ば打って、どもこも痛かった。母がどんこん怒って、お前んごたる者なつらも見ゆうごてなちゆうけん、親類に泊まりぎや行たとった。そしたりや、とうと死んだちゆう知らせの来た。そがん早よ死んでにや思わんじゃった。そがん大病なる、もちった大人しゆしとけばよかたて、ち思うて戻って来た。

そしたりや、例の兄が、おりば「こん親不孝もんが、お前んためにおっかさんが早よ死んだじゃっか」ちゆうた。おりも悔しかったけん、兄が横びんたば張ったりや、えっとばっかおごられた。

母が死んでからにや、親父と兄と三人で暮らしとった。親父は何もせん男で、人ん面さえ見れば、貴様は駄目だ、駄目だち、口癖んごて言うた。何が駄目じゃい未だに分からん。妙な親父も居ればおったもんじゃん。

兄は実業家になるちゆうて、しきりに英語ば勉強しよった。元来女ごんごたる性分で、狡かけん仲んゆうなかつた。